

## 草津温泉ヒアリング調査報告<sup>1</sup>

浅利 一郎・石橋 太郎  
野方 宏・大脇 史恵

### 1. はじめに

本ヒアリング調査報告は、静岡大学人文学部経済学科の教員を中心とした観光研究プロジェクトチームが実施した第6回目の報告である。これまで、静岡県内では熱海市（2004年12月、）、浜松市（館山寺温泉、2005年3月）、伊東市（2005年12月）、下田市および松崎町（2005年12月）、県外では大分県湯布院町（由布院温泉、2005年12月）および熊本県南小国町（黒川温泉、2005年12月）についてヒアリング調査を行ってきた。

草津温泉は日本の名湯100選などで常に上位にランク付けされてきた温泉地であり、また温泉地として由布院温泉などと並んで全国的なブランド力が現在注目されており、県内特に熱海や伊東など伊豆地域での観光を巡る様々な問題を考える上で有力な比較検討先として今回の調査対象に選定した。

ヒアリング調査先は群馬県草津町の草津町観光創造課および草津温泉観光協会であり、2006年11月24日に実施した。主たるヒアリング調査項目は以下に示すように、これまでの調査と同様である。

- (1) 観光統計関連資料の入手および最近の観光動向
- (2) 外国人観光客の誘致活動と受け入れ状況
- (3) 広域観光への取り組み
- (4) 独自の取り組み（観光資源の活用、ブランド化事業など）
- (5) 行政の観光支援活動

---

<sup>1</sup>ヒアリング調査に協力していただいた、草津町観光創造課課長補佐長井英二氏、草津温泉観光協会常務理事阿部公志氏にお礼申し上げる。なお、ヒアリング調査を含めた今年度の研究プロジェクトに対し、人文学部および経済学科より研究資金の助成を受けた。

## 2. 草津町観光創造課におけるヒアリング

日 時 2006年11月24日

対応者 草津町観光創造課課長補佐長井英二氏

上に示した調査項目に対応する形で、ヒアリング調査を以下にまとめておくと、広域観光については次節（草津町観光協会におけるヒアリング）で取り上げることにする。

### （1）草津町の観光動向

草津温泉開湯の歴史は古く、草津町観光商工課作成の『観光要覧』では「今から1,800年前の大和朝の頃に日本武尊御東征の帰途に発見されたとも、奈良時代に大和国菅原寺の僧・行基によって開かれたとも伝えられています」と述べられている。江戸時代の温泉番付では、西の有馬・東の草津と並び称されるほどであったという。

現在でも温泉はすべて自噴泉であり、自然湧出量は全国1で毎分32,000l、ドラム缶に換算して1日23万本にも達するほどである。代表的な源泉は7つあり、中でも湯畑は街の中心に位置し、草津温泉のシンボルとして観光の人気スポットになっている。また、町内には古くから共同浴場（18カ所）が設置されており、地域住民だけでなく観光客にも外湯として利用され、地元の人々の生活の場であるとともに観光客との交流の場ともなっている。

観光入込客数（以下、観光客数）の長期的推移（1970年～2005年）は資料1に示されている。観光客数のピークは1994年（平成6年）の307.7万人であり、基本的には増加傾向を示していた。その後、数％程度の観光客の落ち込みがみられたが、2005年には再び300万人台に回復している。資料2にみられるように、この間スキー客は大きく減少している（例えば、1994年に比べ2001年では48万人、62％近い減少である）。このことは、スキー客の減少を相殺するほどの温泉客の増加があり、温泉の魅力が全体としての観光客減少の歯止めの役割を果たしていたことを意味する。バブルの崩壊に伴い観光客の大幅な減少に見舞われた伊豆地域の観光地（例えば、伊東ではバブル期のピークに比べ25％ほどの減少となっている）とは際立った相違を示している。伊豆地域に比べ交通アクセスや名産品などの観光資源に恵まれているとはいえない草津温泉のこの数字は興味深い。今後の観光地比較の際の検討課題としたい。

2004年度に行われた草津町の観光アンケート調査（『草津温泉来訪者アンケート調査

集計結果報告書 2004（平成 16 年度）』によると、観光客の約 3/4 は首都圏（東京、埼玉、神奈川、千葉）からであり、群馬県内からの観光客は東京、埼玉、神奈川に次いで 4 番目（14.2%）である。交通手段は自家用車・マイカーが 75.1%と圧倒的に多く、電車・バス 14.8%、団体バス 8.5%となっている。観光客の年齢をみると、50 代が 23.8%と第 1 位だが、30 代（19.6%）、40 代（16.7%）、60 代（15.6%）、20 代（12.8%）と幅広い年齢層から誘客できていることがわかる。また、草津温泉を訪ねた回数についてみると、7 割が 2 回以上のいわゆるリピーターであるが、10 回以上のリピーターが 16%近くおり、草津温泉に対する根強い「サポーター」の存在が窺われる。アンケートでの草津温泉の第一印象としては、「温泉」という回答が 9 割近くを占め、また、草津温泉に来て良かったですか、という質問には「良かった」と「大変良かった」が 97.4%と圧倒的多数を占めた。こうした数字にみられる事実が根強いサポーターの存在につながっていることはいまでもないであろう。なお、草津温泉に不足しているものとして（複数回答）、駐車場（24.9%）、名物料理（13.0%）、無料休憩所（11.9%）があげられている。駐車場の問題については、以下の（3）で触れる。

アンケート結果にみられるように、団体観光客への依存度の低さ、温泉の魅力とリピーターの多さなどがバブル崩壊以降の観光客数の落ち込みを緩和し、最近の観光客数の回復を支えた要因と考えてよいであろう。

## （2）外国人観光客

外国人観光客についての統計は、2004 年より外国人受入宿泊施設を対象にデータが取られるようになった。資料 3 にあるように、外国人観光客は 1 万人を若干上回る程度であり、観光客全体（約 300 万人）に占める割合は 0.3～0.4%程度にすぎない。外国人客の 9 割以上はアジアからであるが、台湾からの観光客が圧倒的に多く、全体の 8 割以上を占めている。大手の旅館が外国人の誘客に力を入れているとのことであったが、われわれが調査した伊東温泉の場合と同様特定の民間の旅館の営業努力や PR の結果がこうした数字に表れているかもしれない<sup>2</sup>。

草津町も旅館組合や JR と協力しながら海外キャンペーンを展開している。例えば、2003 年の台湾、香港、韓国を始めとしてオーストラリア（2004 年）、ハワイ（2005 年）、シン

<sup>2</sup>石橋太郎・野方宏「伊東市観光ヒアリング調査報告」（静岡大学『経済研究』11 巻 1 号、2006 年 7 月）を参照。

ガポール（2006年）へキャンペーン先を広げている。また、それとともに外国人誘客のための国際的なイベントも積極的に展開している。1980年以降開催している草津夏期国際音楽アカデミー&フェスティバルに加えて、ノルディック・スキーフェスティバル（2004年）や世界語 ONSEN フォーラム（2005年）などが開催されている<sup>3</sup>。

外国人向けパンフレットは英語・中国語・韓国語を作成しているとのことだが、町中での観光に関係した表示は日本語だけである。ただし、国土交通省が2005年度に創設した観光ルネサンス事業の補助を受け（2年間）、ホームページの作成や観光ボランティアの育成に取り組んでいるとのことだった。

上に述べた草津夏期国際音楽アカデミー&フェスティバルは毎年8月の中旬から下旬の2週間にかけて開催され、毎年各国から数百人規模の外国人が訪れ、1991年には本格的なコンサートホールも建設された。また、この期間中は温泉街のあちこちでもミニコンサートが行われ、地元の人々や観光客が一緒になって音楽を楽しんでいる光景がみられるとのことであった。

### （3）独自の取り組み

草津温泉独自の取り組みとして注目すべきものに「泉質主義」がある。これは、温泉を草津のブランドとして前面に押し出して積極的にアピールしていこうとする考え方であり、旅館組合が2001年に「冬の草津を考える会」を組織し、そこから発案されたものだという。「泉質主義」と題するパンフレットをみると、草津温泉に関する泉質として強酸性とそれに伴う殺菌力による温泉療法が説明され、各種の効能が謳われている。また、豊富な自然湧出量と草津独特の入浴法である「時間湯」や「湯もみ」を紹介し、町内に18カ所ある共同浴場の「湯巡り」が推奨され、草津温泉の魅力がさまざまな角度から取り上げられている。このように、複数の観光資源を総花的にアピールするのではなく、温泉一本に絞ったPRは斬新であり大きなインパクトが期待される<sup>4</sup>。泉質主義に続いて

---

<sup>3</sup> ここでの海外へのキャンペーンについての記述は、日本経済新聞2007年1月19日付け夕刊記事「広角鋭角 外国人を呼び込む」を参考にした。

<sup>4</sup> ただし、2006年12月15日付の毎日新聞には「湯の花 実は 硫黄」と題して、草津温泉で販売されている「湯の花」の多くが源泉から採集された天然湯の花ではなく、公正取引員会から景品表示法違反で製造販売した4社に排除命令、6社に注意がなされた、と報じている。泉質主義に著しく反する行為

「Onsen を世界語に」を次のキーワードにした活動が検討されているとのことであった。

町中の各所に湧出する豊富な温泉の有効利用を図った草津町の事業に温水事業や融雪事業がある。7つある源泉のうち最大の湧出量を誇る「万代」は96度と高温なため、そのままでは熱すぎて温泉として供給できない。そこで、プレート式熱交換器を使用して水道水で54度ほどに温度を下げ、それを宿泊施設で温泉として利用し、熱交換で温められた水道水は温水として宿泊施設や一般家庭に給湯されている。現在、草津町の約2,000世帯程に温水が供給されている。また、この温水や旅館・共同浴場の温泉排湯は幹線道路に埋設された管内を循環し、冬期の道路の融雪に活用されている。

草津町の観光の中心は先に紹介した湯畑であるが、ここも含めて温泉街は道が狭い。また、観光調査アンケートでもみたように、草津温泉に不足しているものつまり草津温泉に対する不満のトップは駐車場の問題であったし、観光客の3/4が自動車利用であることを考えると、この問題は重要である。そのために草津町が導入したのがパーク・アンド・ライド(P&R)である。草津国際スキー場の駐車場を利用し、そこからシャトルバスを運行し、町中まで送迎している。このP&Rは2005年4月から始まり、2006年については、われわれのヒアリング調査時点(11月)で既に10回程度実施し、1日平均1,000人程度の利用者があるとのことであった。現在、町の中心にある湯畑広場の大規模な改造計画に着手しており、それとの関連でP&Rの見直しがなされる予定とのことであった。

### 3. 草津温泉観光協会におけるヒアリング

日時 2006年11月24日

対応者 草津温泉観光協会常務理事阿部公志氏

草津温泉観光協会(以下、観光協会)は1960年より独立した民間団体として活動を開始し、対面・電話・インターネットを通じた観光案内、各種イベントの企画・運営および草津温泉のPR活動などを行っている。また、収益事業として「熱の湯」と駐車場を運営している。熱の湯は湯畑広場の一角にあり、時間湯・湯もみ・踊りと草津節などの紹介と湯もみショーの実演を行っている。以下では、広域観光に絞って観光協会と草津町の活動

---

といわざるを得ない。

を紹介したい。

#### (1) 広域観光：日本ロマンチック街道

日本ロマンチック街道協会は、草津町がドイツのロマンチック街道に倣って近隣の市町村に働きかけ、1987年に設立された。日本ロマンチック街道は長野県小諸市の小諸城址から群馬県草津町をへて栃木県日光市の中禅寺湖に至る230kmの道を総称したものであり、協会長は草津町長、事務局は観光協会内に置かれている。当初は、軽井沢や日光の観光客を草津温泉に誘致する方策として考えられたという。設立の翌年にはドイツのロマンチック街道と姉妹街道の締結を行い、現在まで交流が続けられている。

現在の加盟市町村数は27である。看板・ポスター・パンフレットの作成と各種イベントが主たる活動内容であるが、最大の行事は毎年4月下旬から10月下旬まで半年かけて行われる「日本ロマンチック街道ステッカーラリー」である。2006年では19の市町村がラリーに加わり、764名の完走者に完走者認定証が贈られた（「観光協会だより」第98号、2006年11月）。

「日本ロマンチック街道」については、旅行社でそれに関連した旅行商品が作られたりテレビや雑誌でも取り上げられた、とのことである。しかし、必ずしも日本ロマンチック街道の知名度は高くはない。街道の景観や文化を「売りにする」といったコンセプトやそれを具体化する観光資源が不足しているとも思われない。ヒアリングの際に聞かれた「観光地をライン[線]で結びつけるのは難しい」という発言が的を射ているのかもしれない。広域観光の可能性を考える際の留意すべき点であろう。

#### (2) 他の広域観光の試み

日本ロマンチック街道以外の広域観光の試みとして、1999年に締結された「Mt.6 ベスト オブ ザ クラシックマウンテンリゾート」がある。これは、日本の近代スキー発展の牽引役となった6つの伝統ある山岳リゾート（長野県の野沢温泉・志賀高原・白馬八方尾根、山形県の蔵王温泉、新潟県の妙高高原、群馬県の草津温泉）が協力して活性化を図る目的で設立されたものである<sup>5</sup>。設立から日が浅いこともあるが、当初の目的を実現できているとはいいがたいようである。

上記以外に、夏期における志賀高原との連携による観光客の誘致、群馬県西部の吾妻地域7町村による東京での「吾妻でお宝を探しませんか」というテーマのPR活動（2004

---

<sup>5</sup> ちなみに、日本で最初のスキーリフトは草津国際スキー場の天狗山スキーリフトである（1948年）。

年、2005年)が広域観光を視野においた活動として紹介された。

資料1 入込客数の推移

年次別入込客数の状況

年次	項目	総入込客数 (人)	前年比 (%)	日帰り客数 (人)	前年比 (%)	宿泊客数 (人)	前年比 (%)
昭和	45	1,674,196	133.3	443,640	149.9	1,230,556	128.1
	46	2,295,668	137.1	792,598	178.7	1,503,070	122.15
	47	2,004,425	87.3	530,791	67.0	1,473,634	98.04
	48	2,329,210	116.2	577,198	108.7	1,752,012	118.89
	49	2,229,365	95.7	572,869	99.2	1,656,496	94.55
	50	2,552,141	114.5	587,279	102.5	1,664,862	100.51
	51	2,156,876	84.5	580,496	98.8	1,576,380	94.69
	52	2,161,050	100.2	605,092	104.2	1,555,958	98.70
	53	2,233,253	103.3	645,819	106.7	1,587,434	102.02
	54	2,165,300	97.0	616,981	95.5	1,548,319	97.54
	55	2,199,845	101.6	630,098	102.1	1,569,747	101.38
	56	2,248,751	102.2	658,134	104.4	1,590,617	101.33
	57	2,073,500	92.2	596,573	90.6	1,476,927	92.85
	58	1,960,007	94.5	572,206	95.9	1,387,801	93.97
	59	2,136,707	109.0	601,759	105.2	1,534,948	110.60
	60	2,250,485	105.3	623,525	103.6	1,626,960	105.99
	61	2,507,397	111.4	686,679	110.1	1,820,718	111.91
	62	2,459,501	98.1	722,428	105.2	1,737,073	95.41
	63	2,488,449	101.2	752,972	104.2	1,735,477	99.91
平成	元	2,601,550	104.5	786,483	104.5	1,815,067	104.59
	2	2,621,038	100.7	798,374	101.5	1,822,664	100.42
	3	2,647,369	101.0	801,405	100.4	1,845,964	101.28
	4	2,722,124	102.8	840,334	104.9	1,881,790	101.94
	5	2,924,536	107.4	1,036,256	123.3	1,888,280	100.34
	6	3,077,179	105.2	1,090,727	105.3	1,986,452	105.20
	7	2,809,955	91.3	1,007,232	92.3	1,802,723	90.75
	8	2,882,439	102.6	1,025,834	101.8	1,856,605	102.99
	9	2,811,446	97.5	996,834	97.2	1,814,612	97.74
	10	2,758,765	98.1	979,083	98.2	1,779,682	98.08
	11	2,965,191	107.5	1,061,785	108.4	1,903,406	106.95
	12	2,831,587	95.5	1,041,508	98.1	1,890,079	99.30
	13	2,970,462	104.9	1,048,414	100.7	1,922,048	101.69
	14	2,988,953	100.6	1,068,941	102.0	1,920,012	99.89
	15	2,953,331	98.8	1,057,585	98.9	1,895,746	98.74
	16	2,892,968	98.0	1,034,348	97.8	1,858,620	98.04
	17	3,001,629	103.8	1,077,876	104.2	1,923,753	103.50

資料2 草津国際スキー一場入込客数（単位：人数）

年次	12月	1月	2月	3月	4月	5月	合計
平成6年	90,977	221,000	238,600	203,740	20,510	245	775,072
平成7年	65,786	185,250	201,800	168,100	15,200	280	636,416
平成8年	62,294	127,600	160,100	134,900	10,830	380	496,104
平成9年	38,625	118,100	130,900	102,900	8,215	0	398,740
平成10年	38,375	99,050	99,600	79,300	6,105	155	322,585
平成11年	30,955	83,520	88,980	69,080	8,015	605	281,155
平成12年	25,957	83,089	89,670	58,735	7,555	525	265,531
平成13年	35,001	92,074	97,340	67,868	3,221	334	295,838

資料3 外国人入込客数調書

		2004年		2005年		2006年10月時点	
		人数	前年比	人数	前年比	人数	前年比
アジア	台湾	11,595	0.00	8,056	69.48	8,295	103
	韓国	407	0.00	469	115.23	585	124.73
	中国	146	0.00	142	97.26	560	394.37
	香港	256	0.00	393	153.52	695	176.84
	その他	141	0.00	73	51.77	60	82.19
	北アメリカ	101	0.00	142	140.59	202	142.25
	南アメリカ	9	0.00	4	44.44	9	225.00
	ヨーロッパ	176	0.00	90	51.14	184	204.44
	アフリカ	1	0.00	1	100.00	0	0.00
	中近東	1	0.00	14	1400.00	0	0.00
	オセアニア	68	0.00	74	108.82	152	205.41
	合計	12,901	0.00	9,458	73.31	10,742	113.58